

撃、全員大負傷や出血のため、「ここをしぼってくれ」と言いながら次々と死んでゆきます。私も人を助けたが自身も重傷で戸塚海軍病院送りとなりました。弾の摘出に麻酔もろくにせず痛い何のの話ではなかったのです。まだ三個ほど弾が背中に残っています。負傷者が次々と入ってくるため十日ほどで快癒、退院しました。

八月十五日、天皇陛下の玉音放送を海兵団の庭で何方という兵員が集合して聞きました。その放送はあまりはつきり聞きとれませんでした。「負けた」ということは聞き取れ、部屋に帰って大声をあげて泣きました。喜んだような下士官もいましたが大方は大泣きしていました。大部隊のことで多少の混乱もあったのですが、八月下旬復員しました。皇国護持のためと「秘密図書」を持ち帰りました。

我が家も長兄は満州奉天で戦病死し、次兄は近衛野砲隊でシンガポール攻撃後印度洋アンダマン群島へと参戦し、昭和二十一年復員しました。家督を次兄が継ぎ、私は分家して織物卸業を営み現在に至っています。

す。

思えばあの東大東亜戦争において幾百万の人命が失われ、水漬く屍、草むす屍と散華された人々のご冥福を祈ります。願わくば二度と戦争のない平和日本、世界平和を祈念します。

海軍従軍記

九死に一生を得ること二一回

山形県 矢萩 信一

私は、大正十年六月三十日、山形県天童市で生まれました。昭和十七年一月十日、舞鶴海兵団に入りました。入団当時の私の家庭は、農業で果樹園（ブドウ、モモ、サクランボ）を営んでおり、両親・長兄・次兄・姉・私・弟・妹という家族構成で、生計はまあまあ普通でした。私が兵役のため、海軍へ入隊しても大した経済的打撃はない状態で、私も後顧の憂いなく、勇躍日本男児の本懐と家郷を後にしたことでした。

私と同時に入隊した壮丁は十人ぐらい、町長や在郷軍人分会長その他有力者の激励、祝辞を受けて、それぞれの目的地へ散りました。その当時の感激は約六十年を経た現在でもハッキリと覚えています。

舞鶴海兵団に入団して四カ月間新兵教育を受けました。この教育期間中の海軍魂涵養のため、海軍の伝統であり、名物とも言うべき罰ちよくをはとんど毎晩のように受けました。「甲板に整列」との号令がかかる、私達新兵は「また、やられるか！」と悲壮な覚悟で整列しました。軍人精神注入棒という檣の棒（長さ約一・五メートル、直径五〜六センチ）で尻を思いきり叩かれます。まれには棒が二つに折れ飛んだこともありましたが、されるままに奥歯をぐっと噛み締めて、無抵抗で耐えなければなりません。班長さんは京都弁で怒鳴りながら叩き続けます。尻は内出血で黒く変色し痛いこと。現在の言い方によると、まさに暴行のし放題でしょうか。海軍の伝統となれば致し方ありません。

他の隊のことを噂で聞きました。「若い新兵が尻の

上の腰椎を叩かれて骨折し、下半身不随で兵役免除になつて一生不遇な生活に苦しみ泣いた」とか。この罰ちよくは四カ月の新兵教育が終わつてからも受けました。あの精神注入棒のことを忘れることが出来ないのは、私一人のことではないでしょう。

また、短艇競漕のメンバーになるとオールを漕ぐ腕力、体力、叱咤激励に耐えきれず無念にも肺結核となり、退団した例もあつたとか。とにかく言語を絶する深刻な労苦の地獄社会であつたことは、何人も否定出来ぬ事実でした。後で顧みると、「よう頑張り抜いて四カ月を耐え抜いたものよ」と思います。

次は普通科運用術学校入校です。学校は舞鶴にあり、入校期間は四カ月でした。運用術とは、常に甲板にあって、錨の出し入れ、舵取り等を司る任務でした。この在校期間中も精神注入棒は健在で、私達も再び苦しめられましたが、どうにか卒業出来ました。同時に休暇一週間。懐かしい故郷で父母、肉親と抱き合つて喜びました。

舞鶴へ帰ると一等巡洋艦「名取」乗組を命ぜられ、呉へ列車で行き仮入隊。当時は厳しい戦時下のこと。機密、極秘で「名取」のトン数、長さ、乗組員数等の他一切私達新兵には不明でした。

艦は呉にはおらず、南方海域にすることが後日判明しました。昭和十七年十月十一日、「室戸丸」という商船に便乗して、はるばるとジャワ島のスラバヤへ十五日間を要して着きました。「名取」はおりませんでした。スラバヤで仮入隊、便船待ちです。この間捕虜のオランダ兵の見張り、農作業など毎日異なった作業をしました。

十二月末「金山丸」に便乗、スラバヤ発シンガポールへ向け(?)出港、北上し、ボルネオ海峡航行中敵潜の魚雷攻撃により「金山丸」は無惨にも沈没しました。スラバヤ出発時には、「いよいよ『名取』に乗り組めるぞ」と喜び勇んだものでした。ところが間もなく敵潜攻撃で「金山丸」は沈没。「ああ、これが戦争だ」と初めて事態を認識したのです。その時「金山丸」は単独行動で船団を組んではいなかったため、潜

水艦の攻撃を受けて船尾よりゆっくりと沈みました。

私は運用術の学校で応急のことも習っていたので、泡を喰って騒ぐ乗船者を指導してボートを降ろし、二人足らずをボートに収容し、まだ海面を泳いでいる人には「渦に巻き込まれる。早く速くへ離れる」と何回も大声で叫びました。私は指揮者ではありませんが、学校での修得知識があったので、いろいろと指導助言をしました。

海上を漂流しているとやがて夜が明け、幸いにも地元の前住民の漁船に見えられ近くの島へ護送されました。その島はマサシレ島という小さな島でした。時あたかも昭和十八年一月一日でした。九死に一生を得てマサシレ島へ上陸をしました。島の住民は親日的で親切。食物は芋、バナナその他いろいろ豊富で、天ぷら料理もありまさに食料天国でした。島には何日かいて、歩いて広いバナナ畑を横切りボルネオのバリックパバンへ行きました。そこで Dengue 熱を発病し、軍の病院へ入院して大事に至らず助かりました。

次いでセレベスのマカッサルへ移り仮入隊しまし

た。ここは酒保もあり大きな根拠地でした。でも「名取」はどこにもいません。再びスラバヤへ行けと命令され、今度は戦艦「筑摩」に便乗させられました。今までの商船と違い戦艦ともなると速力が大変速く、予想より早い日数でスラバヤ着。再入隊しました。

昭和十八年四月、飛行機でスラバヤよりシンガポールへ。ようやく「名取」がいました。ドック入りをして敵にやられた個所の応急修理中でした。修理を終えて舞鶴へ帰り本修理をすること、やっと「名取」に乗れました。ドック入り中だから勤務というものはないので、そこで「お前等はたるんでいる。ちょっと気合を入れてやる。艦橋のところへ整列！」ときます。注入棒ではなくビンタです。これは大したことなく助かりました。

五月、山本五十六司令長官戦死。六月、「名取」舞鶴帰港、修理。私は休暇、天童の父母の元へ。あつと言う間に休暇終了。海兵隊にあって雑作業をしつつ待機。九月、水雷艇「初雁」へ乗り組みを命ぜられ、下関を経て佐世保へ。「初雁」は佐世保にはおらず、香

港にいました。

海防艦に便乗して高雄へ。「初雁」は香港―高雄間の船団護衛に任じていました。水雷艇は小型で波によく揺れるため、私は船酔いにかかり苦しみました。しかし本格的乗り組みとして勤務につき、責任を果たす気持ちは優先して船酔いも克服出来ました。人間やはり気持ちの持ちよう次第だと気付いたことです。香港―高雄間の護衛任務中は敵の飛行機に狙われたこともありました。艇長の好判断により被害を免れました。

敵潜の魚雷攻撃も再三受けました。艇の見張り員が魚雷の航跡を発見して大声で報告します。私は運用術の要員で常に甲板上で勤務している関係上、魚雷の来るのが見えました。艇は舵を右へ左へと転じ素早くかわします。艦長の見事な操作に敬服しました。

「わーっ、来る、来る」と皆恐怖の叫び声で心が硬くなりました。うまくかわして魚雷が通過すると、「ファーツ」と大息をつき顔を見合わせて肩を抱き合い、地獄から生き返ったように祝い喜びました。九死に一生を得たように。こんな体験は戦場でなければ

ば味わえませんが。人生は、生と死は紙一重。経験者でないとは分かってはもらえないでしょう。

不穏な相談がありました。新兵教育に引き続き、ずっと私達に精神注入を行ってきた班長がちょうど同じ艇に乗り合わせていました。私達の恨みは深く、「あの野郎め。ただではおかぬ。報復してやれ」との同年兵の気運が醸し出され気持ちが一致しました。夜間航行の勤務中に皆でよってたかって奴をつかまえ、海へ放り込めと衆議一決。しかしなんとなく実現しませんでした。悪運の強い奴と思わざるを得ません。

昭和十九年三月、高等科航海学校へ入学を命ぜられ、横須賀へ移りました。六月卒業して舞鶴へ。八月「第十七号輸送艦」艦装員として呉へ。完成して同艦乗組となりました。この艦は特殊潜航艇（特攻隊一艦二人乗組）を左右に一艦ずつ横に抱えており、人間は最初輸送艦に乗っています。目的地まで来ると特攻隊員が自分の艇に移乗して輸送艦から切り離されて、目標に突っ込んで敵を撃破するという特攻兵器です。最

初の攻撃は沖繩で突っ込み成功しました。

昭和二十年の一月か二月頃、輸送艦は呉を出て、途中、山口県で艇と人を積み込みました。二回目の攻撃のため出発しましたが、その当時はもう沖繩へ行けない情勢で、止むを得ず途中の奄美大島の湾内に停泊中、昼間敵機の爆弾攻撃で艦は沈没。「金山丸」に次いで二度目の九死に一生を得て、小さい商船で佐世保へ生還しました。

私は甲板上にいる勤務ですから敵の爆弾と機銃に全身をさらしていました。何人かの戦友は護国の鬼となりました。私は武運が強かったのか、あるいは父母の祈りで氏神さんが守ってくれたのか。

私達は艦長の命令で退艦し、湾の近くの山へ退避しました。艦を出る時握り飯を持たせてくれ、それで飢えをしのぎました。島にいる間、「大和」が南下中とのニュースがありました。昭和二十年四月七日のことです。沖繩へ行き浮き砲台として攻撃するとの由。西の方るか遠く水平線のその向こうの空をゴマ粒くらいに小さく見える敵機が入れ替わり立ち替わり急降下

しているのが遠くに見えました。大編隊が次から次へと「大和」を襲っているのです。不沈戦艦「大和」と世界に誇った巨艦の最期をかいま見たのも、海軍軍人として何かの縁であったのでしょうか。海底深く艦とともに沈み、今なお眠り続ける数多くの水漬く屍の英霊に、心よりの感謝と御冥福を祈り誠を捧げるのは、生き残りの戦友の忘れてはならぬ責務です。

佐世保から舞鶴へ戻ると、また休暇。ありがたくいただいて天童へ。氏神様へお礼詣りは欠かしませんでした。

五月より運用術普通科の教員を命ぜられ終戦まで勤めました。今までの労苦を補っても余りある恵まれた毎日でした。

古参の先輩を飛び越して、下士官に登用され高等科の学校へまで入校出来たのは、尽忠報国の赤心と不断の努力、不屈の攻撃精神等の総合的結晶と考えられます。海軍従軍中の困苦を試練として乗り切ったことは、私のその後の人生処世に大きく影響して、現在自

信をもって、ささやかながら満足した毎日に恵まれていると思ひ、海軍の伝統や上級者、同年兵に感謝していません。と共に若くして悠久の大義に殉じて護国の鬼となった英霊にも心よりの追悼をし、併せて御遺族の御多幸を念願しております。

復員は昭和二十年八月三十日天童の自宅着でした。

昭和二十一年結婚し、女、女、男と三児をもうけ、孫には七人も恵まれました。妻も健在です。

娘に誘われてハワイ旅行をし、真珠湾を訪れました。この水面上に九軍神の英霊が鎮まっていると思えば、ただもう涙、涙、涙でしばらくは追悼の念で万感胸に溢れたものでした。もちろん妻も同行しました。

現在は老夫婦で仕立屋（学校関係）を営み、結構多忙に暮らしています。

生き残った戦友と戦友会に出席しては、昔話に花を咲かせて楽しい思い出にひたり、また、英霊に盃を捧げて在りし日を偲んでいます。

私も健康に恵まれ、日本人の平均寿命に達しました。老後を何とか国家、社会のためにはと思ひます。帝

国軍人すべての人の熱い願いであると思います。

海軍特別陸戦隊―海南島―

台湾出身志願兵との絆

石川 泉 健 一

私は小学生のころは中国の上海に住んでおり、海軍陸戦隊のラッパや鐘の音を聞いて暮らしていた。上海事変の時には白い軍装で銃剣を持った水兵さんに学校まで送り迎えをもらったので、日本の軍隊は陸戦隊であると思っていた。陸軍を知ったのは、親の故郷の金沢へ来て第九師団を見てからだ。

昭和十八年十月二日、大学・高等専門学校学生の徴兵延期が廃止になり、理工科系学生以外の文科系学生は十二月に陸海軍に入らなければならなくなる。これが、現在もニュース映画や写真に残る、いわゆる学徒出陣である。

私は、十二月十日舞鶴海兵団に入団するように通知

を受けていた。残された二カ月間、前途を思ったり、何をどうすればよいのか全く手がつかない毎日だった。

十月二十一日、出陣学徒の壮行会が明治神宮外苑で行われた。学校の校庭でも在校生徒諸氏の壮行会が行われ、学生服に巻脚絆、帯剣を腰に締め、小銃を持って代々木の会場に向かった。小雨が降り出し黙々と列が進み、服は濡れて薄寒かった日である。

やがて入口にさしかかると拍手の嵐であった。ハッと我れに返り見上げると神宮外苑のスタンドは拍手をする女学生で埋まり、髪から雨の雫が落ちて黒髪が光って見えた。分列行進が「抜刀隊」の行進曲に合わせて前進し、水溜まりも何のその、足が自然に高く上がり、泥のはねが背中の上までいっぱいになり我を忘れて進んだ。

東條首相、文部大臣、陸・海軍大臣の激励の言葉、残る学生代表の送る言葉に、出陣学徒が答辞を述べ、「天皇陛下万歳」を三唱し解散した。

文部省主催で挙行した学徒出陣壮行会には、東京局